



平成25年6月末、京都大学は、第2期中期目標期間の3年目となる平成24事業年度の財務諸表等を文部科学大臣に提出しました。そして、9冊目となる「財務報告書 Financial Report 2013」を取りまとめました。

本学は創立以来、自由の学風のもと闊達な対話を重視しつつ、京都の地において自主独立の精神を涵養し、高等教育と先端的学術研究を推進して、116年が過ぎました。

特に平成24年度は、本学iPS細胞研究所長の山中伸弥教授がノーベル生理学・医学賞を受賞し、昨今の厳しい経済状態により研究環境の悪化が危惧される我が国の研究者、とりわけ若手・中堅研究者を大いに鼓舞する出来事となりました。

平成24年6月に文部科学省より示されました「大学改革実行プラン」においては、社会を変革するエンジンとしての大学の役割を国民の皆様にも実感していただくことを目指し、大学機能の再構築と大学ガバナンスの充実・強化という大学改革の方向性が示されております。国立大学は、自主的、自律的に我が国の成長と発展の原動力として教育研究・社会貢献機能の抜本的強化を図っているところであり、本学においても着実に改革を推進しているところです。

このような中、伝統を基礎とし革新と創造の「魅力・活力・実力ある大学」を目指して、多元的な課題の解決への挑戦を継続し、地球社会の調和ある共存に京都大学らしく貢献するためには、財務体質の強化がますます重要であり、自己収入の拡充や外部資金収入のさらなる多角化を図るべく鋭意努力しています。

この「財務報告書 Financial Report 2013」は、京都大学が取り組んでいる事業を財務の側面から取りまとめたものですが、本学を支えてくださる皆様にとりまして、より身近でわかりやすい報告書となるよう心がけました。本報告書によって本学の活動状況をご理解いただき、皆様方からのますますのご指導とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

総長 松本 紘

国立大学は、いよいよ法人化から10年目となる節目を迎え、その真価が問われる段階に至っており、社会から要請される役割を一層積極的に果たしていくことが求められています。一方で我が国の財政は、東日本大震災からの復興・復旧や高齢化に伴う社会保障費の増大などの諸問題を抱え、極めて厳しい環境に置かれている状況です。

このような状況下において、本学が国際的な競争の中で、世界のリーディング大学としての機能を強化し、社会を変革するエンジンとしての役割を担うためには、財政基盤を安定させて教育・研究・医療の質の維持・向上を図る必要があることから、基盤的経費の確保に努めるとともに、国の財政状況に大きく影響を受けないような財務運営が可能となるよう、これまで以上に国の予算以外の新しい財源の確保、さらには創出への取り組みが不可欠であると考えています。

この点について本学では、教育研究活動のさらなる活性化に向けて、国の予算である特別経費の獲得を図るほか、各種の競争的資金の獲得に向けた促進・支援活動の一層の強化を図り、多くのプログラム資金を獲得しています。

また、本学の財務体質の強化・改善のための取り組みとして、長期的な展望を持った大学運営や部局運営を可能とする予算構造への転換を目指して、学内予算配分の抜本的見直しを行うなど、現状を踏まえつつ将来を見据えた新しい財務運営の仕組みの構築を進めているところです。

今回お届けいたします「財務報告書 Financial Report 2013」は、多様な財源に支えられている京都大学における様々な財務活動を中心に、企業会計とは異なる国立大学法人に特有の財務制度をわかりやすく説明しつつ、最新の活動状況を紹介していますので、本学へのご理解とご支援の参考としてご覧いただき、忌憚のないご意見を幅広くお寄せいただけますことを切にお願いいたします。



副学長・理事(財務・施設・環境安全保健担当) **西阪 昇**